

ご紹介・選評

Profile

東京生まれ。日本の神話や伝承をいかしたファンタジー読物や絵本を数多く発表。『クヌギ林のザワザワ荘』で日本児童文学者協会新人賞他、『小さなスズナ姫』シリーズで新美南古児童文学賞、『盆まねき』で野間児童文芸賞等を多数受賞している。他の作品に『葉の子先生』シリーズ、絵本『まゆとおに』など。



とみ やす よう こ
富安 陽子
童話作家

童話にせよ、絵本にせよ、満足できる作品を作り上げようと思つたらまず、お皿の大きさに合った材料を用意しなくてはなりません。一人分の料理を作るのに五人分の材料を用意したのではお皿から溢れてしまいます。応募作の中にはよく、受け皿と題材が合っていないと思われるもつたない作品があります。長編にしたらきつと面白いだろうけど……とか、絵本の画面のどこにこんなたくさんの方の文章を入れるのだろう？とか……。まずは自分の作品にぴつたり合う新鮮な材料探しから始めましょう。

Profile

岡山市生まれ。現在は長野県大町市に在住。『季節風』同人。『たんばたろう』で毎日童話新人賞、『京のかざぐるま』で日本児童文学者協会賞、『なまくら』で野間児童文芸賞を受賞。主な作品に『風の海峡』上下巻、『すし食いねえ』『はっけよい！雷電』『小説鶴杉』『風雪のペン』などがある。



よし はし みち お
吉橋 通夫
児童文学作家

コロナ禍・マイノリティ・場面緘黙症など、むずかしい素材やテーマに果敢に挑んだ作品がいくつかあり、とても励まされました。たとえ十枚以内という制約はあっても、そのようなテーマに、これからも取り組んでほしいものです。親が離婚した子どもの心理を見事に描いた作品がありましたが、会話文と地の文のつなげ方が単調過ぎるので賞から外れました。応募される方は、出来る限り原稿用紙の使い方や文章の書き方の基本をマスターしましょう。

Profile

日本児童文学の研究者。立教大学文学部日本文学科卒。同大学院修了。宮城教育大学助教授等をへて、現在、武蔵野大学名誉教授。日本児童文学学会会長、日本児童文学者協会評議員も務める。『現代児童文学の語るもの』(NHKブックス)、『物語もつと深読み教室』(岩波ジュニア新書)など著書・編著多数。



みや かわ たけ お
宮川 健郎
(一財)大阪国際児童文学振興財団 理事長

童話は、子どもたちに何かを語ります。でも、大人のことで書いてしまうと、子ども読者に伝わらない。そこで、作者が子どもになつて語るという方法が生まれます。「ながみちくんがわからない」は小学生の「わたし」として、「おとうさんはとまらない」や「KOKU BANMARU」は「ぼく」として語られます。読者は、「わたし」や「ぼく」といつしよに作品世界を体験します。三人称で書かれた「風おくりの夜」は、あたたかな春の夜を見渡して、「風おくり」を描き出します。

審査員の

Profile

新潟県生まれ。色鉛筆を使った細やかであたたかい画風の絵を数多く発表。主な絵本作品に、『ごんぎつね』『手ぶくろを買いに』『猫の事務所』(偕成社)、『おかあさんの目』(あかね書房)、『ころわんシリーズ』(ひさかたチャイルド)、画集に『雲の信号』(偕成社)などがある。



くろ い けん
黒井 健
絵本画家

最終審査に残った作品は絵と文の完成度においては拮抗しています。それらの作品の中から、各賞に選出することには、おおいに迷うことになります。個性に満ちた作品、アイデアに秀でた作品、そして日々を新鮮な視点で描いた作品と、価値の異なるものを比較することに悩みます。審査員が各作品について意見を交わし、再読、再々読していくうちに作品の印象が変化していきます。魅力が増していく作品と、薄まっていく作品です。前者が大賞作品となり、絵本として出版されることになります。

Profile

愛知県生まれ。あたたかい線でユーモラスな動物たちが登場する絵本を数多く発表。主な作品に、『どっちからよんでも』(絵本館)、『ワニぼうのこいのぼり』(文芸堂)、『うし』(アリス館)、『よいこはもうねるじかん』(BL出版)、『オレ・ダレ』『プービーとすべりだい』『ふたりのナマケモノ』(いずれも講談社)などがある。



たかは たけ じゅん
高畠 純
絵本作家

それぞれ作品をみつつ、浮かび上がってきたのは作(文)と絵のバランスです。絵はいい感じでも作が普通で弱かったり、またその逆もあったり。絵本は必ずしも物語だけでなくアイデアや視覚的表現を主とするのもあっていい。けれど、どれもこの一冊に作者の姿勢がちゃんとみえてくるのが大切。絵を含め作を創るのはそう簡単ではないかもしれない。でも、粘つてあれこれ考えてみよう。もつと粘つて完成できるものもある。全く思わぬ方向からやってくるものもある。これも大きな一つのチャンス。

Profile

同社は、「環境」「安全」「ダイバーシティ」を社会貢献領域の中期重点分野と定め、活動に取り組む。次代を担う子どもたちへの支援は、同社が社会貢献活動を通じて一貫して取り組んでいるテーマであり、1984年のグランプリ創設以来、協賛を続けている。



うち だ まこと
内田 誠
日産自動車(株)
代表執行役社長兼最高経営責任者

「日産 童話と絵本のグランプリ」は、日産自動車を取り組む社会貢献活動の中で最も長い歴史を持つ活動です。第37回は未曾有の事態での実施となりました。新型コロナウイルス感染拡大は私たちの生活に影を落とし、創作活動にも少なからず影響を与えたと思いますが、このような状況にもかかわらず、素晴らしい作品を応募いただいた皆さま、グランプリ実施にご尽力いただいた関係者の皆さまに心より感謝いたします。今後も皆さまのご協力をいただきながら「日産 童話と絵本のグランプリ」を大切に育てて参ります。